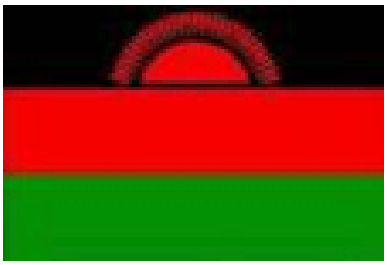
マラウイ共和国

【国名】

●1964 年の独立に際し，新国家に新たな光をもたらすとの含意から，現地チェワ語で「光・炎」等を意味する「Malavi」に由来しています。

【国旗】

●赤色は血，黒色はアフリカ人，緑色は自然を，太陽の日の出は独立後の発展を象徴しています。



【国土】

●約 4,800km あるアフリカ大地溝帯の南端に位置する内陸国で，面積は日本の３分の１（約 11.8 万㎢）程度です。首都はリロングウェで，人口は約 1,862 万人です。

【マラウイ湖】

●マラウイ国土の５分の１近くを占めるマラウイ湖は，ビクトリア湖，タンガニーカ湖に次ぐアフリカ大陸で３番目に大きな湖で日本の琵琶湖の 46 倍の大きさです。マラウイ湖の北東はタンザニア，東部の一部はモザンビークに接しています。

●1984 年に南端のマラウイ湖国立公園がユネスコの世界遺産に指定されており，ダイビングでも知られるマラウイ最大の観光スポットです。

●マラウイ湖には固有種の魚が多く，シクリッドという観賞用の魚（青や赤の体色）は卵をメスが口中でかえし，そのまま稚魚を口中に入れて守るマウス・ブ

リーディングで有名です。また，カンパンゴというナマズ類の魚は「子育て」をすることで知られています。メスは稚魚の孵化後に多量の無精卵を産み，これを稚魚に食べさせ，オスは自分の体で稚魚を覆うようにして敵から守り稚魚を育てます。

【ムランジェ山】

●南部の高地にあるムランジェ山は標高3,002mで，南部アフリカ最高峰です。山の麓には茶のプランテーションが広がっています。

【マラウイ料理】

●メイズ（白トウモロコシ）の粉をお湯で溶き，加熱し練った「シマ」と呼ばれるものが主食です。米は高級品で，かつては宗教行事や結婚式等祝いの席で供されましたが，現在では，都市部で普及しつつあります。

●主要なタンパク源は魚で，おかずの代表はマラウイ湖固有種のチャンボです。チャンボとはシクリッド科オレオクロミス属（チャンボ属）の数種類の魚の総称であり，体長 20～30 センチの白身で淡泊な味がします。唐揚げにしてシマと一緒に食べることが多いです。

【灌漑事業】

●マラウイは，総労働人口の約 80%が農業セクターに従事しており，農業が経済成長の原動力となっています。しかし，灌漑開発の遅れから天水農業を軸としているため天候の影響を受けやすく，特に近年は気候変動に起因する干ばつや洪水の頻発による水・食糧不足が発生するなど，課題を抱えています。

●このような状況の下，日本は技術協力として，「中規模灌漑開発維持管理能力強化プロジェクト」を進めており，マラウイの農業環境の改善を推進しています。

【スポーツ】

●英連邦に属してはいるがクリケットやラクビーは盛んではなく，サッカーやネットボールが人気です。

●2018 年３月，プロサッカーチーム「ビィ・フォアード・ワンダラーズ（日系企業の所有）」から，日本のクラブでプレーする初のマラウイ人選手として，ジャブラニ・リンジェ選手がＪ3 に属するＹ．Ｓ．Ｃ．Ｃ．横浜に移籍しました。

【一村一品運動】

●マラウイでは，大分県を発祥地とする「一村一品運動（One Village One Project: OVOP）」を大統領自ら主導して 2003 年にアフリカで最初に実施しました。2006 年以後は JICA の技術協力支援（10 年間）や日本の NGO の支援を受けて，同運動を推進し，主な OVOP 商品は，キロンベロ米，はちみつ，バオバブオイル，食用油，モリンガパウダー，石けん，アフリカの布を用いた工芸品等があります。

はちみつ，バオバブオイル等は日本にも輸出されています。

　また，ヤマト運輸，佐川急便は，社会貢献活動の一環としてマラウイに農産物や製品運搬のための中古トラックを寄贈しており，ヤマト運輸や佐川急便の文字が書かれたトラックが走っています。

車両贈呈の様子（写真：ヤマト運輸（株）提供）

首都リロングウェに到着した佐川急便のトラック

（写真：SG ホールディングス（株）提供）

【青年海外協力隊】

●日本の対マラウイ援助は,1971 年の青年海外協力隊(JOCV)派遣から始まりました。2011 年 8 月に協力隊派遣 40 周年記念行事としてビング・ワ・ムタリカ大統領（当時）夫妻主催の式典が大統領官邸で開催されました。50 年近くに及ぶマラウイへの JOCV 派遣数累計は 1900 名以上にのぼります。JOCV から数学を学んだという閣僚もおり,マラウイにおける浸透度は高いです。現在も約 60 名が教育,保健,農業等の分野で活動中であり, 任期満了隊員に,マラウイ外務･国際協力大臣名の感謝状が授与されています。

【風をつかまえた少年】

●学費を払えずに学校に通えなくなった後，図書館の本で勉強しながら自転車を利用して風力発電機を作り出したという実話に基づいて出版され，日本でも話題となった『風をつかまえた少年』の著者，ウィリアム・カムクワンバは，首都リロングウェから 100 キロメートル程離れたカスングの出身です。「それでも夜は明ける」の主演俳優キウェテル・イジョフォーが監督及び脚本をつとめ，2019 年に映画化され，Netflix でも配信されました。（日本では未配信）